令和６年度　図画工作科実践・研究計画

部　員	○三浦　茉子、大森　果歩

研究テーマ
表したいことをはっきりともち、「学びのものさし」を活用しながら表現を工夫していく子どもを育む学び

1　研究テーマについて

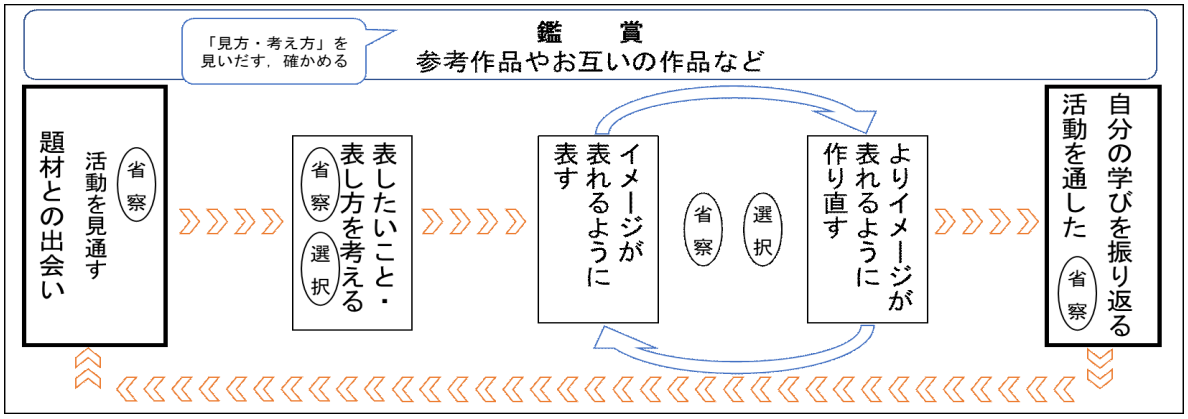
図画工作科の特質は、自分が表したいことを形や色で表すことである。形や色に着目した「見方・考え方」を自分のものとし、深めていくことが「学びのものさし」を更新していくことにつながると考え、昨年度までの実践を行ってきた。

２年生の実践では、子どもが表現する前に物語の世界に入り込むことができるような設定をすることにより、表したいことをはっきりともつ姿が見られた。また、「何をしているところなの？」「そこはどんなところ？」というように、作品に描いた物語を引き出すような語り掛けにより、作品の構成や形、色などの表現を工夫しようとする姿が見られた。

また、鑑賞を通して気付いた「魚の形をはみ出させると海の広い感じがするな。」「色が薄いと優しい感じがするな。」というような造形的な「見方・考え方」を、自分の表現に活用しようとする姿が見られた。だが、こうした姿は一部の子どもに留まり、全ての子どもが自分にとって意味のある気付きを得る鑑賞となっていたとは言えない。表現と鑑賞が互いに働きかけ合い、高まっていく鑑賞、表現の自己決定に刺激を与えることができる鑑賞の在り方を今年度も探っていきたい。

自分の「見方・考え方」を深めていくことで表したいことを見付ける力が高まり、表現の幅も広がるものと考える。自分が表したいことをはっきりともち、更新した「学びのものさし」を活用して表現を工夫していく子どもの姿を目指して、研究を積み重ねていきたい。

図画工作科で目指す自律した子どもの姿
- 表したいイメージに近付くように表し方を工夫したり、造形的な活動を工夫したりしながら、「学びのものさし」を更新していく姿。
- 作品づくりや鑑賞を通して自分の見方や感じ方を深め、自分の学びを自覚して今後に生かそうとする姿。



図：図画工作科　自律した学習者を育てる学習のプロセス

2　研究の重点〈○は具体的な取組の例〉

形や色などに着目した「見方・考え方」を働かせながら、表現や活動を工夫していく子どもを支えるための手立て

○表現の効果に着目して作家の作品や友達、自分の作品について話し合うなど、その後の表現の自己決定に刺激を与えることができる鑑賞の在り方の工夫。

○子ども一人一人の表したいことを見取り、効果的に表現できるような気付きにつなげるための、子どもとの対話を大切にした支援。